

令和元年6月18日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2018

課題番号：16K04345

研究課題名（和文）成人の発達障害の多面的評価ツールと心理教育プログラムの開発-チーム支援に向

研究課題名（英文）Development of a multi-assessment scale and psychoeducational program for adults with Autism Spectrum Disorder for team support.

研究代表者

高橋 美保（Takahashi, Miho）

東京大学・大学院教育学研究科（教育学部）・教授

研究者番号：10549281

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では自閉スペクトラム症傾向（ASD）に注目し、成人の生活能力や就労能力とASD特性の強さを同時に測定する簡易型の多面的評価尺度を開発した。さらに、ASD傾向者が地域の援助資源につながるための心理教育プログラムを開発した。その際、地域性を考慮して文京区に焦点化し、福祉、医療、就労の現場で活躍する支援者の講演を元にプログラムを開発した。プログラムで多面的評価尺度を活用し、現場の支援者が簡便にASD傾向者の評価を行うとともに、地域支援連携で役立てることを企画した。ただし、文京区に絞ったこと、加療中の人に絞ったことなどから研究期間中に実施に至らなかったが、プログラムは今後展開する予定である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

成人の発達障害については様々なアセスメントが存在するが、多くは医学的症状に関するものである。本研究で開発した尺度は生活や就労能力も含めて測定できる点、心理や福祉の支援者が現場で簡便に使用できる点で、実践的かつ学術的なツールといえる。また、本研究で開発した心理教育プログラムは、医療・福祉・就労・心理の専門職から最新の知識を結集したものであり、地域の支援情報だけでなく発達障害全般の理解、尺度を用いることで自身の特徴も理解できる点において、これまでにないプログラムである。このプログラムをきっかけに自身の特徴に応じて地域の様々な資源につながり、ツールを介した多職種チーム支援が実現することが期待できる。

研究成果の概要（英文）：We focused on adults with autism spectrum disorder (ASD) symptoms and created the “Multiple Assessment for Adults with ASD” (MAAASD), a scale constructed to measure the psychological and service needs of adults with ASD by providing data regarding an individual’s ability to live and work independently, with information about their ASD symptoms. We developed a psychological educational program for adults with ASD tendencies to help them reach out to local providers. Taking into consideration the locality of community providers, we created the Bunkyo-ku Model program, which is based on lectures from six specialists working in welfare, healthcare, and career development in Bunkyo-ku. We also planned to use the MAAASD to evaluate an individual’s ability in multiple areas and share it with providers in the future. Although we were unable to implement the program within the study period as it included people living in Bunkyo-ku and those under medical treatment, we plan to continue it.

研究分野：臨床心理学

キーワード：心理学 臨床心理学 心理アセスメント 心理教育プログラム

1. 研究開始当初の背景

【研究の社会的背景】

発達障害はこれまで乳幼児期・児童期・思春期など人生の初期の支援について論じられることが多かったが、昨今、成人後、就労段階になって発達障害の診断を受ける成人の発達障害の問題が注目されている。成人期には就労支援や自立、恋愛、結婚、親亡き後など成人期特有の問題があり、人生初期よりも生活支援や経済的問題など多面的な支援が必要となる。しかし、具体的な支援について画一的な方法論はなく、個々特有の支援を構築する方法論が必要となっている。

【研究の動向】

支援方法を検討するためには適切なアセスメントを行う必要がある。近年、発達障害についてはスクリーニングや評価・診断のためのアセスメントツールが開発されており、欧米のアセスメントツールの日本語版や日本独自のものが開発されつつある。黒田(2015)は発達障害の包括的アセスメントを、「発達障害に特化したアセスメント」「知的水準・認知特徴のアセスメント」「適応行動のアセスメント」「感覚や運動のアセスメント」「併存する精神疾患」「心理社会的・環境的アセスメント」の6つの要素に分類し、領域毎に特化したアセスメントツールを提示している。

しかし、実践現場ではそのすべてを網羅的に行うことは現実的ではなく、実際には必要なものを複数ピックアップしてテストバッテリーを組むこととなる。また、発達障害については生活の視点の重要性や(村瀬、2014)、生物・心理・社会モデルの必要性が指摘されているが(下山、2014)、それらをバランスよく組み込み、かつ現場で簡便に使えるアセスメントツールは存在しない。

【研究の学術的背景】

本来、アセスメントに基づいた支援計画を作成する必要があるが、特に成人の発達障害については明確な診断がつかないケースや受診に至らないケースもある。症状や困り感の現れ方に個性が高く、全体像がつかみにくいために、適切な支援にもつながりにくくなっている。心理的援助を行う相談機関においても、生活の中の生きづらさを包括的に理解できないため、サポート資源の全体像や各援助機関の役割分担が把握できないまま今できる心理的援助を行うために、援助の混乱が生じることもある。発達障害は生物・心理・社会にわたる問題が複雑に絡んでいることから、具体的な介入を行う前に個人の特徴と援助資源の活用状況も含めた包括的で簡便なアセスメントを行い、援助につなげることが有効と考えられる。

また、先行研究では問題に注目しがちであったが、成人になるまで一定の適応をしてきたストレングスやレジリエンスに注目することが有効と考えられるが、その状況を包括的に把握する具体的な研究は行われていない。ポジティブな側面も含めた多面的理解が多面的支援へとつながり、各援助機関で情報を共有するプラットフォームを作ることができれば、今後の多職種によるチーム支援を効果的に行うことができる。

2. 研究の目的

発達障害傾向のある成人を対象に、生活人としての生きづらさを生物・心理・社会モデルに則って包括的に理解するとともに援助実態を整理する多面的なアセスメントツールを開発する。その際、生きづらさだけでなくポジティブな側面もアセスメントする。また、上記ツールによる個別の障害特性の評価と一般の発達障害特性の両方から自己理解を促進するための集団式心理教育プログラムを開発・実装・評価を行い、必要なチーム支援体制の構築につなげることを目的とする。

3. 研究の方法

【研究1】多面的アセスメントツールの開発

アセスメントツールの開発：準備段階で生成された各領域に基づき、項目の選定を行う。

尺度作成：

予備調査) 大学生 500 名(本学その他、複数校で実施可能である)を対象に、で作成した多面的アセスメントツールを実施する。因子分析を行い、因子構造を確認し、項目の微修正を行う。本調査) 成人 1,000 名を対象にインターネット調査を行い、多面的アセスメントツールを使用した量的調査を行う。再度、因子分析を行い、因子構造を明らかにし、尺度を完成させる。

【研究2】心理教育プログラムの開発

一般の発達障害特性の理解のためのプログラムの作成と個別の発達障害傾向を理解するためのプログラムを開発する。

【研究3】心理教育プログラムの実装と評価、プログラムの精緻化

心理教育プログラムの実装：

研究者の所属する相談機関において研究ベースで運用を開始する。7回×10名(1回)を予定。

プログラム評価とそれを基にした精緻化：

プログラム評価を行い、評価をもとにプログラムの精緻化を行う。プログラム評価には参加者に対する質問紙調査(メンタルヘルス指標含む)および可能な場合には面接調査を実施する。

フォローアップ調査：プログラム参加後の援助機関の使用状況や機関同士の連携状況について、プログラム参加者(70名)、連携した場合には連携機関の担当者(7回×2名)を対象に質

問紙及び面接調査によるフォローアップ調査を行う。

結果の公表：随時、結果を公表する。

4. 研究成果

【準備段階】研究1に向けた事前研究

事例研究：成人の発達障害傾向を持つ相談事例をもとに、多面的アセスメントに必要と思われる領域の選定を行った。

文献研究：成人の発達障害傾向に関する文献および書籍を分析し、事例研究で生成された領域をさらに精緻化、困り感の領域と援助資源領域を抽出し、各々の領域の現状把握と援助資源の確認する作業を行った。

【研究1】多面的アセスメントツールの開発

項目検討：

準備段階で生成された各領域に基づき、項目の選定を行うため、既存のアセスメントツールを精査し、各領域に係る尺度としてAQ、Vineland、就労チェックシート、RAADSなどの項目を参考とした。また、尺度では網羅しきれない情報を得るためのフェイスシートも作成した。

尺度作成：

予備調査として、2016年6~8月に大学生を対象とする調査を行った。大学生605名(本学の他、複数校で実施)を対象に、作成した多面的アセスメント尺度案と妥当性を検討する複数の尺度を用いて質問紙調査を行った。因子分析を行い、5因子構造であることを確認した。

さらに、2017年3月に本調査を行った。インターネット調査のモニターである成人2,064名(男性・女性×18歳以上-20代、30代、40代、50代各258名)と、2017年5~6月にA発達障害者支援センターの成人の利用者20人(男性13名、女性7名)を併せて、計2,084名のデータを対象とした。

その結果、作業能力、生活能力、対人関係能力、こだわり傾向、コミュニケーション能力の5因子28項目が得られ、妥当性と信頼性も確認された(表1参照)。この尺度については、日本発達心理学会で公表し、多くの方に興味を持っていただいた。現在は学会誌に投稿中である。

表1 成人のASD傾向者多面的評価尺度の因子分析結果

| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
|---|-------|-------|-------|-------|-------|
| 第1因子：作業能力 (= .815) | | | | | |
| 1 指示通りに仕事をすることができ | .855 | -.114 | -.033 | .033 | -.043 |
| 2 必要な業務連絡や報告をすることができ | .638 | .148 | .009 | .074 | -.056 |
| 3 遅刻や欠席の連絡ができて | .610 | .179 | -.071 | -.032 | -.037 |
| 4 仕事への集中力がある | .597 | .026 | .027 | -.143 | .067 |
| 5 1日(7~8時間)を通して活動できる体力がある | .500 | -.040 | .052 | .034 | .076 |
| 6 インターネットなどから必要な情報を自分で入手することができ | .493 | .037 | -.043 | .112 | .017 |
| 7 かかわる相手との親しみの度合いに応じてふるまいを変えることができる | .487 | -.025 | .050 | .068 | -.071 |
| 第2因子：生活能力 (= .820) | | | | | |
| 8 自分で電話をかけることができる | -.054 | .849 | .037 | -.022 | -.046 |
| 9 基本的な電話応対ができる | .084 | .729 | .053 | -.084 | -.036 |
| 10 簡単な料理をすることができ | .080 | .672 | -.130 | .122 | -.137 |
| 11 約束通りのサービスが提供されない時、それを適切に伝えることができる | -.116 | .592 | .183 | .056 | -.087 |
| 12 部屋の片づけができて | .018 | .575 | -.058 | -.147 | .179 |
| 13 自分の体調不良に気づき、薬を飲む・病院に行く・休むなどの必要な対応をすることができ | .121 | .440 | -.056 | .161 | .028 |
| 14 家計のやりくりができて | -.134 | .421 | -.065 | -.018 | .167 |
| 第3因子：対人関係能力 (= .794) | | | | | |
| 15 友達を作ることは難しい | -.027 | -.125 | .732 | .044 | .016 |
| 16 人付き合いにおいて、どのように振舞ったらよいかかわからないことがある | -.147 | .009 | .667 | .144 | .145 |
| 17 パーティーや会合などでいるいる人の会話についていくことができる | .007 | .092 | .623 | -.056 | .006 |
| 18 他人と、雑談のような社交的な会話を自然に進められる | .021 | -.001 | .603 | .008 | -.113 |
| 19 自分の話を聞いている相手が退屈しているときには、どのように話をすればいいかわかっている | .057 | -.035 | .525 | .022 | -.087 |
| 20 自分の意思あるいは感情を表現できる | .175 | .151 | .413 | .048 | -.058 |
| 21 他人と力を合わせて助け合うことができる | .244 | .050 | .377 | -.121 | .185 |
| 第4因子：こだわり傾向 (= .635) | | | | | |
| 22 日課や予定が変更になると、落ち着かない | .100 | -.026 | -.015 | .717 | -.021 |
| 23 自分が好きなやり方を急に変わると、ひどく混乱してしまう | .120 | -.005 | .030 | .506 | .217 |
| 24 同じやり方を何度も繰り返していることが好きだ | -.068 | .034 | .155 | .499 | -.064 |
| 第5因子：コミュニケーション力 (= .530) | | | | | |
| 25 誰かと話すときに相手の言葉をさえぎらない | .100 | .032 | -.001 | -.150 | .580 |
| 26 ある考えや話題が頭から離れなくなると、誰も興味を示さなくても、その話をしなないと気がすまないこと | -.125 | .106 | -.111 | .285 | .506 |
| 27 私は他人の誤りを指摘しがちだ | -.045 | -.111 | -.087 | .076 | .481 |
| 28 私は周りから、普通ではないとか変わっているとと言われることがある | .016 | -.031 | .118 | -.040 | .391 |
| | 1 | .721 | .468 | .194 | .361 |
| | 2 | -.530 | .223 | .313 | |
| | 3 | | .305 | .279 | |
| | 4 | | | .282 | |
| | 5 | | | | |

【研究2】心理教育プログラムの開発

プログラム内容の検討：

一般の発達障害特性の理解と発達障害の援助資源を学ぶことに加え、個々の発達障害傾向について自己理解を促進し、必要な資源につながるようするための心理教育プログラムを開発した。研究1の成果について日本発達心理学会でポスター発表を行い、多くの研究者と意見交換を行うとともに、多面的アセスメントツールの援助現場での活用可能性や、それを用いた心理教育プログラム開発の在り方について、発達障害センターのスタッフにグループインタビューを実施し、プログラム開発について研究メンバーで議論を行った。

多職種による講演会の実施：

その結果、まずは、東京都で成人の発達障害支援を行っている複数の専門家（医療、福祉、就労、心理職）を訪問して意見交換を行った。そのプロセスの中でいくつかの方針を立てた。その一つが文京区モデルの開発である。地域援助については地域性も高いことから、まずは本学の地元でもある文京区をモデルとして開発することとした。この変更に伴い、文京区で医療、福祉、就労に関わっている他職種の専門家による講演会を企画・実施し、その内容をもとにプログラムを開発した。もう一つが、心理的支援を加えることである。意見交換をする中で、改めて心理職の役割が明確になった。それを受け、海外の援助実践も参考にしながら心理的支援についても内容に含むこととした。

プログラムの作成と精緻化：

さらに、支援者側の視点だけでなく、当事者の視点も加えるべきであると考え、当事者にもインタビューを実施し、プログラムについて意見をもらい、プログラムの精緻化を行った。最終的に、誰でも実施できるようプロトコルを作成し、パワーポイントの資料として完成させた。

【研究3】心理教育プログラムの実装と評価、プログラムの精緻化

プログラムの実装に向け、1回3.5時間×3回のプログラムを企画し、プレイヤーを作成して、地域の支援機関に配布した。同時に、申し込み手続きのためのシステム作りを行い、申し込みのフローを整えた。ただし、実際に研究ベースで実施するに際しては、各支援機関から、医療への通院者を対象とすべきとの指摘もあり、対象を通院中のASD者とした他、実際のASD傾向と健康状態を確認するため、スクリーニングのステップを設けたこともあり、実施可能な募集人員に到達せず、実施に至らなかった。今後引き続き、対象者の選定、実施のフローを見直し、プログラム実施に向けて試行する予定である。

| 構成 | コマ | テーマ |
|-----------|----|-----------|
| ・基礎知識編 | 1 | 発達障害とは |
| | 2 | 個人と環境 |
| | 3 | 自分を知る |
| ・地域の援助資源編 | 4 | 医療にできること |
| | 5 | 生活での困りごと |
| | 6 | 自分に合った働き方 |
| ・自分に活かす編 | 7 | 心理的援助 |
| | 8 | Q&A |
| | 9 | 振り返り |

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計1件)

高橋美保・黒田美保・田川薫・中山奈緒子・斎藤さらさ・野村佳申・馬場絢子・アレクザンダー・クリーグ、成人の発達障害傾向を測定する多面的尺度の開発 - 多職種連携につなげるために、2018、日本発達心理学会第29回大会(東北大学)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：黒田 美保

ローマ字氏名：Miho, Kuroda

所属研究機関名：名古屋学芸大学

部局名：ヒューマンケア学部

職名：教授

研究者番号(8桁)：10536212

(2)研究協力者

研究協力者氏名：安田 節之(法政大学キャリアデザイン学部教授)

ローマ字氏名：Yasuda, Tomoyuki

研究協力者氏名：村山 光子(学校法人明星学苑府中校事務長)

ローマ字氏名：Mitsuko, Murayama

研究協力者氏名：池谷 彩(学習院大学大学院人文科学研究科臨床心理学専攻博士後期課程)

ローマ字氏名：Aya, Iketani

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。